

教皇庁生命アカデミー会員への教皇フランチェスコ講演

枢密会議室、2024年2月12日（月）

「人間、意味、課題」

**Discorso del Santo Padre Francesco ai Membri della Pontificia Accademia per la Vita**

**sala del concistoro, Lunedì, 12 febbraio 2024**

***Human, Meanings and Challenges***

卓越した皆様、

パリア大司教、高位聖職者の皆様、そして新たに就任したチリ・サンティアゴの大司教にご挨拶申し上げます。ライフサイエンス、健康、ケアの研究領域におけるあなた方の尽力、30年前から生命アカデミーが推進してきた尽力に感謝します。

今回の年次大会で取り組まれる問いは、最重要な問いです。すなわち、人間を特徴づけるものを、どのように理解しうるのか。それは古い問いですが、つねに新しい問いです。新たなテクノロジーによって可能になった驚嘆すべき資源は、よりいっそう複雑な様相を再び呈しています。学者たちの貢献はつねに、人は機械やテクノロジーにアприオリに「賛成」か「反対」かはっきりした立場をとることはできないことを明確にしてきました。なぜなら人間の経験に関係づけると、このような二者択一は意味がないからです。今日もまた、自然的プロセスと人工的プロセスとを区別して、前者を真に人間的なもの、後者を人間的でないもの、あるいは人間性に反しさえするものとしてとらえるような主張は、納得がゆくものではありません。それは機能しません。必要なことは、そうではなくて、科学技術の知識をより広い意味の地平に内接させることです。そのようにしてテクノクラシーの覇権〔支配〕を遠ざけることです（cf. 回勅『ラウダート・シ』108, 2016年）。

たとえば、テクノロジーによって提供される手段と方法によって人間を生産する試みを取り上げてみましょう。かかるアプローチは、人間を、生殖可能なパフォーマンスの集合体——その基盤は、どの種の情報も数値コードを使って表現されうることを仮定するデジタル〔計数型〕言語です——に還元することを必然的に含意します。聖書のバベル\*の塔の物語との明らかな相似（cf. 創世記 11 : 1-9）は、一つの言語を創造する欲望が、いかに深く人類の歴史に根ざしているかを示しています。神の介入は、しばしばすべてがあまりに慌ただしく単なる懲罰として考慮の対象外に追いやられますが、それはむしろ祝福の一種として、人間の言語の増殖・拡散による「単一思考」への漂流に逆らう試みとして、ポジティブにとらえることができます。このようにして、人間は自らの限界と傷つきやすさに直面し、相違を尊重し、相互に関心を示

すよう要求されることになるのです。

確かに、増大し続ける科学技術の可能性によって、人間は神に似た創造のわざの主人のように感じさせられるようになります。それは、「話す機械」を備え付けられているかのような、言語能力を封入された、人間の生命のイメージと似姿を生み出します。では、生命のない (inanimata 魂の抜けた) 物質に精神 (spirito) を吹き込むことは、人間の力でできるのでしょうか？ 誘惑は潜行性の (insidiosa 人間に潜在している) ものです。私たちに問われているのは、人間に委ねられた創造性が、いかに責任ある仕方で行使されうるかを識別することです。大切なのは、人間が外形を損じて構造的・本質的な相違を破棄することを阻止しつつ、受け取った才能を投資することです (cf. 創世記 1-3)。

第一の課題は、したがって、人間学的な課題です：私たちは、文化を発展させるよう要求されています。それは、科学技術の資源を統合することによって、人間をその削減できない特異性において承認し、促進することのできる文化です。この特異性が、言語〔理性〕の上流、すなわち情熱と感情、熱望と知性の領域にも配置されうるかを探究する必要があります。この領域において、人間だけが神に助けられて、利他的な関係性の感覚をもって認識し、真価を認め、変化させることができるのです。したがって、これは文化的課題です。文化は生命と社会的実践〔慣習、習俗〕の自発的な力を造形し、方向づけるからです。

親愛なる友人たち、取り組まれる主題が困難であるのと同様、それを履行する二つの様式もまた困難なものです。第一に、あなた方は効果的な対話、学際的な交換 (cross-disciplinary exchange) をなし遂げるために、*Veritatis Gaudium* (『真理の喜び』教会の大学と学部における使徒憲章、2017年12月8日) が記述する次のような形態で働いています。すなわち、「神の啓示に由来する知恵によって示される光と生命の空間にすべての知恵を配置し発酵させる作用として」(n. 4c)。私はまた、あなた方の熟考が、いわば「キリストの出来事〔受肉〕からあふれ出て、聖霊によって豊かにされる知恵と知識の賜物を糧にする、現実の遂行的\*\*解釈を教会が実行する、真の固有の文化の実験室」のロジックにおいて展開されている事実も尊重します (同 3)。ですから、相互の見解を交換しつつ、他者と相互作用しながら、各人が自分自身の熟考を提供することができるよう奨励します。これが、相互の傾聴と批判的な熟考をとおして、諸々の学識の単なる並列を超えて、私たちの認識を改訂する道です。

第二に、あなた方の出会いのダイナミズムのうちに、シノドス的手順 (procedere sinodale) \*\*\*の様相が見られます。それはアカデミーのミッションの中心的な主題に取り組むのに適しています。それは実質的には、要求の多い研究の一つのスタイルです。なぜならそれは細心の注意と精神の自由、どの不毛な「後戻り (indietrismo)」からも解放された、まだ探究されていない未知の小道に分け入る開放性を要するからです。真剣で福音的な思考の刷新に献身する者には、

これまで批判的に検討されてこなかった確立した意見や仮説にさえ疑いを差し挟むことが不可欠です。

この点において、キリスト教は、意味に満ちた要素を、それが根付いたどの文化からも吸収することによって、また、福音に示されたキリストとの関係に照らしてそれらを再解釈することによって、また、個々の脈絡に現われる言語的および観念的資源を活用することによって、つねに際立った貢献を果たしてきました。これは、多くの世代を包摂しうる知的アプローチを要求する、長い、そしてつねに再開しなければならない周到綿密な道です。それは、その果実が彼らの子供たちによって消費されることを知りつつ木を植える人、あるいはそれが未来の世代によって完成されることを知りつつ大聖堂を建造する人の知恵と視界になぞらえることができます。

私がキリストによって、あなた方のために祈り求めたいと思うのは、この開かれた、責任ある、聖霊に従順な態度です\*\*\*\*。聖霊は風のように、「どこから来るのかも、どこへ行くのかも分からない」（ヨハネ 3, 8）。作業があなた方にとって実りある豊かなものになりますように。心からあなた方を祝福します。そしてどうぞ私のために祈って下さい。ありがとう！

[ ] は訳者による。

#### 【訳注】

\* 「バベル」はセム語の「混乱」に似た言葉であるが、語源は「神の門」という言葉である。言葉を乱されたことは、神の罰というより、高ぶった人間の計画を打ち砕くのが目的であった。神はみ旨にそむくことや、あるいは単に自然の力にだけ頼る人間の行為が成功するのをお許しにはならない。（フェデリコ・バルバロ訳『聖書』、訳注、講談社、1980）

\*\* 遂行文 (performative) : その文を発することが、その文の表わす行為の遂行となる文。ex. I promise to marry you. (『リーダーズ英和辞典』第3版、研究社、2012)

\*\*\* 「シノドス的手順」 = 霊における会話 (Conversation in the Spirit)。

現在、下記のスケジュールで開催されているシノドス（世界代表司教会議）〔synodus の原義：道とともに歩む〕で採用されている手法。

2021年10月9日：開会宣言  
2021年10月～22年8月：教区別会議  
2022年8月～23年3月：大陸別会議  
2023年10月4日～29日：全体会議＝第16回通常総会第1会期（ローマ）  
2024年10月：同上・第2会期（ローマ）

(Cf. 「家庭の友」 サンパウロ、2024年2月号「特集・世界代表司教会議（シノドス）第16回通常総

会) )

\*\*\*\* 「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、1人1人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、『霊』が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した」(使徒言行録 2-1 ～ 4)。聖霊降臨の奇跡の一つである。使徒たちは各国のことばを話した。それはバベルでの混合を再び統一したことであり、かたがた使徒たちのかたどりでもあった。(バルバロ・上掲・訳注)

traduttore : Etsuko Akiba [秋葉 悦子・訳]